

丁寧体の会話における縮約形使用に関する一考察

日本語の母語話者と学習者の会話を比較して

福島悦子・上原 聡

1. はじめに

縮約形およびそれに類するくだけた表現は丁寧体の会話の中でもごく自然に現れるものもあり、自然な会話運びのうえで重要なものの一つで、丁寧体を用いる相手との会話においても、効果的にとりいれることが不可欠であると考えられる。しかしながら実際には、丁寧な表現として縮約しないあるいはくだけない形式だけを中心に学び初級を終えた学習者が中級に入って様々な形で現れたそれらの表現を理解できずに困惑したり、上級になっても自然な縮約形やくだけた表現の使用が身につかなかつたりすることも起きている。このような状況のなかで、学習者がどのような縮約形およびそれに類する表現形式を実際に用いているのか、それがその場面で適切な使用なのかを、実際の会話データを用いて分析した研究は、きわめて少ない。

本研究は、学習者が遭遇することが多いと考えられる丁寧体を基調とした会話場面を取り上げて、そこでの日本語学習者の縮約形およびそれに類するくだけた表現の使用の実態について求める。それを同じ状況で収集したデータでの日本語母語話者の使用実態と比較し、両者の異なる点について検証して、その原因を求め、学習者がそれらの表現を適切に使用するための一助とすることを目指す。以下、第2節で先行研究、第3節で本研究のデータについて記し、第4節で分析及び考察を行い、第5節でまとめとする。

2. 先行研究

「くだけた表現」としてしばしば言及されるものに縮約形がある。縮約形に関しては種々の先行研究があるが、本研究に関係の深いものについてここで概要を記す。

縮約の定義に関しては大坪(1982)、斉藤(1991)がある。本研究では、斉藤の定義に従っているが、斉藤(1991)は、大坪(1982)でとりあげられた縮約形に関して詳細に吟味し、縮約形とそれ以外のものを区別している。斉藤の縮約形の定義は以下のとおりである。

「現代日本語において、同一と認められる語(句)が異なった複数の音形を持って現れるとき、その音形間において次のいずれかの音声的過程が認められた場合、その認められた方の形を『縮約形』と呼ぶ」(斉藤1991:92)。斉藤のあげる音声的過程は次の三つである。

- a. 音節数の減少(音節の脱落・融合) 例: けれども けど、では じゃ
- b. 音数の減少(単音の脱落) 例: monoda monda

c. 音量の減少（音の長さの短縮） 例：honto: honto

次に、日本語教育での縮約形の扱いについての記述のあるものを取りあげて、その内容を整理したものを、表の形で示す。

	データの種類	代表的な表現形式	特徴
川瀬（1992）	日本語教科書、新聞、辞書、テレビ番組、作例等	それじゃ、食べりゃ、行かなきゃなんない、どうしたって、書いてる、等	機能語に見られる縮約形について定義・分類し、その文法記述を試みた。
土岐（1975）	テレビの教養番組	やあり（やはり）とこ、じゃ、わかんない、いろんな、てる、等	正式な場面で縮約形がどのような現れ方をするものか、縮約形の使用回数と話す速度とは比例するものかどうかを求めた。
堀口（1989）	4つのテレビ番組と9つのラジオ番組	んです、もんです、んで、じゃ、てる、ちゃう、てく、とく、（持って）いってる、（高く）なきゃ・なけりゃ、（な）くちゃ（いけない）なんない、そりゃ、等	ある種類の縮約形を文法と関連させながら日本語教育に取り入れていこうという立場から、日本語の話しこたばにおける縮約形の実態を捉えた。
峰岸（1999）	筆者が作成し、録音した刺激会話、絵本の解釈についてのインタビュー、教科書（ダイアログと会話練習の部分）	んだ、けど、じゃ、てる、てない（グループ1）ちゃう、って、じゃ、もん、くちゃ（グループ2）なん、って、そりゃ、てく、んない、とく、こりゃ、ありゃ（グループ3）	刺激会話（18の原形／縮約形のペア）を日本人母語話者に聞かせて[自然さⅠ]かまわなさⅡについて評価を求め、縮約形を（初級から導入するか、どんな場面で用いるか等）3つのグループに分けた。さらに自然のデータを用いて修正を行い、縮約形の段階的、継続的な指導の必要性を指摘した。
上原・福島（2004）	初対面の日本語母語話者同士の丁寧体を基調とした自然な会話	んだ、こんな、なんか、てる、てない、ちゃう、じゃ（接続詞）やっぱ（り／し）、みんな、等	くだけた表現として縮約形のみでなく、「拡張形」とでも言うべきもの（とって）をも対象として体系的に扱い、丁寧体基調の会話におけるくだけた表現形式使用の実態に関して、同形でも異なる機能のものを細かく分け、検証を行った。

3. データと分析対象

本研究では、上の表中の上原・福島（2004）で得られた縮約形およびそれに類するくだけた表現の使用実態と、同じ状態で収録したデータから得られた学習者の使用実態を比較する。

まず次項で、上原・福島（2004）にも通じるデータの性格とその収集方法に関して明らかにする。次に、上原・福島（2004）の研究結果を紹介し、その結果から本研究の観点および分析対象を示す。

3.1. 収集方法

自然な会話データを収集するため、本来の目的をあかさず、「文化による習慣の違いについての意見を聞き、日本事情研究の資料とする」という名目で協力者を募り、丁寧体を基調とした会話が行われると予想される初対面の人同士のパア（日本語母語話者と学習者）を24組作った。ペアの一方（日本語母語話者）にはインタビュアーとして会話をリードすることを依頼し、ペアごとに文化による習慣や考え方の違いについてのテレビ番組の録画ビデオのクリップを見せ、それについての感想や意見を話し合い、適当なところでまた次のテーマのビデオクリップに進むという形で話し合いをしてもらった。ビデオのテーマは、「挨拶言葉（いい天気ですね、ご飯食べましたか）」、「親子関係」「夫婦別姓」である。収録後、各参加者に本来の目的を説明し、調査結果を言語学研究のために使用することについての了承を得て、これを文字化し、データを作成した。今回データとして使用したものは1999年1月から2月（第1期）、1999年11月（第2期）に収録したもののうち学習期間が3年以上の学習者11名の資料で、総時間は約100分である。学習期間3年以上の学習者に限ったのは、学習期間が短い学習者の発話には縮約形や拡張形などのくだけた表現が出現しにくいと考えたためである。下の表1に参加者（学習者）の背景を示す。表中1～5は第1期、6～11は第2期に収録したものである。

表1 参加者の背景

学習者番号	年齢	性別	国籍	母語	学習期間	滞日期間
L 01	31	F	韓国	韓国語	3年	3カ月
L 02	37	F	中国	中国語	3年	3年5カ月
L 03	32	F	中国	中国語	4年	4年3カ月
L 04	25	M	ドイツ	ドイツ語	4年	9カ月
L 05	22	M	ベラルーシ共和国	ベラルーシ語	3年	4カ月
L 06	24	F	中国	中国語	4年	1カ月
L 07	22	F	オーストラリア	英語	8年	1年9カ月
L 08	21	F	アメリカ合衆国	英語	3年	1年
L 09	26	M	アメリカ合衆国	英語	3年	5カ月
L 10	25	M	中国	モンゴル語・中国語	10年	1カ月
L 11	28	M	韓国	韓国語	5年	1カ月

* 表中の記号はそれぞれ次のものを表す。F：女性、M：男性

3.2. 対象

前項で述べた全く同じ初対面の状況で、上原・福島(2004)では母語話者同士の会話を分析したわけであるが、その分析結果のうち、学習者の会話を分析する本研究に関わる点をまとめて示すと以下のようになる。

- (i) ぐだけた表現には、形式的に形が短くなる「縮約形」だけでなく、むしろ形が長くなる、言うならば「拡張形」とも言うべき形式があり、縮約形とほぼ同様のぐだけた状況で使用されることが分かった。
- (ii) 基本形から派生されると考えられる「縮約形」や「拡張形」の中でも、初対面の丁寧な会話において派生形がほとんど使用されないものから、派生形式のほうが頻繁に使用されるものまで、割合が様々であることがわかった。後者の中には縮約あるいは拡張された形式がほぼ100%使用され、くつろいだ表現としてのニュアンスを失い、それ自体が基本形となりつつあると考えられるものがあった。
- (iii) 同じ形式でも、それが生起する統語的状況やその果たす機能によって、縮約形をとりやすい場合ととりにくい場合とに分けられるものがあることが分かった。例をあげると、文頭で接続詞として用いられるもの(例:じゃ……)と否定に前接する「じゃ+否定」のもの(例:じゃない)は前者、二つの助詞の結合した「では」からのもの(例:中国じゃあ「……」っていうのがある)は後者となる。

以上にもとづき、本研究では、3.1.の方法で収集した日本語学習者のデータから、「縮約形」と「拡張形」をとりあげ、分析の対象とする。縮約形については2の先行研究であげた斉藤(1991)の定義に従う。拡張形に関しては、斉藤(1991)の縮約形の定義aからcであげた「音節数の減少」「音数の減少」「音量の減少」の「減少」を「増加」に読み替えるものとする。データに現れた例をあげれば、「と」に対しての「って」、「やはり」に対しての「やっぱり」、「あまり」に対しての「あんまり」などである。

4. 分析および考察

3のデータから、日本語学習者の縮約形および拡張形使用の特徴として、次の三つのことが明らかになった。

- 1) 個人により使える表現形式に偏りがある。
- 2) 母語話者では縮約形のほうが基本形となっているものでも、縮約形でない表現形式を用いる場合がある。
- 3) 母語話者も使うが、それとは違う文脈で使っている表現形式が見られる。

以下で、詳細について述べる。

4.1. 分析結果

4.1.1. 個人による使用表現形式の偏り

学習者のデータに見られる縮約形および拡張形使用の特徴として、母語話者が多彩なくだけた表現を丁寧体においても使用するのに対して、学習者は個人により「使用する/できる表現形式」と「使用しない/できない表現形式」が明確に分かれていることがあげられる。その代表的なものとして、「けど」の類がある。「けど」の類は参加者全員が使用している表現形式であるが、「けれども、けれど、けども」等の異形態があり、上原・福島(2004)では、「母語話者が『けど』を中心にそれらを巧みに組み合わせて会話を行っている」ことが観察された¹⁾。一方、学習者のデータでは、「けど」とその異形態である「けれども、けれど、けども等」の使用に関して、個人による偏りが見られる。下の表2は、各々の形態の使用状況を参加者別に示したものである。

表2 参加者別「けど」の類の使用状況²⁾

	L01	L02	L03	L04	L05	L06	L07	L08	L09	L10	L11
けど(文頭)									3		
けど(句末)	7		3	5	1		15	22	5	3	26
けど(文末)		1		2	1		5	1	2	4	6
けども(文頭)		1									
けども(句末)									1		
けれど(句末)				1							
けれども(文頭)		2									
けれども(句末)				3		3					
けれども(文末)										1	
けどでも(句末)				5							
けどでも(文末)				1							
だけども(文頭)		4									

* Lは学習者を、01から11は会話番号を表す。

表から明らかなように、L01、L03、L05、L07、L08、L11は「けど」のみを、L06は「けれども」のみを使用している。L08とL11の「けど」の使用例を例1、例2に、L06の「けれども」の使用例を例3に示す。

例1 たとえば、あの、アメリカでは冗談ですけど、たとえば(略)(L08)

例2 そんなことを、なんか心に持っている人が多いと思うんですけど。(L11)

例3 (略)雑誌とかテレビもよく見ますけれども、この、親と、んー、親父と一緒に(略)
(L06)

一方、L02、L04、L09、L10は、少なくとも二種類以上の表現形式を用いており、その点で母語話者の使用状況に準じているように見えるが、その使用文脈を詳細に分析すると、母語話者とは異なった状況があることが分かる。その点に関しては、4.1.3で述べる。

4.1.2. 母語話者が基本形として使用している縮約形における学習者の使用実態

学習者の会話に見られるくだけた表現使用の第2の特徴として、3.2の(ii)で述べた「母語話者においては縮約あるいは拡張された形式がほぼ100%使用され、くつろいだ表現としてのニュアンスを失い、それ自体が基本形となりつつあると考えられるもの」が学習者の会話では必ずしもそうっていないことがあげられる。その典型的な例として、指示語の「こ/そ/あ/どのような」と、その異形態(縮約形)である「こ/そ/あ/どんな」を取り上げる。

「こ/そ/あ/どんな」は、母語話者には「こ/そ/あ/どのような」の異形態としての意識はほとんどなく、むしろ会話で「こ/そ/あ/どのような」を「こ/そ/あ/どんな」の代わりに使うことは丁寧すぎ書き言葉的であるとさえ思われるものである。しかし、学習者のデータを観察すると、例えばL02、L08では「こ/そ/あ/どんな」の使用はなく「こ/そ/あ/どのような」のみを使用していることが分かった。例4でL08の使用例を示す。

例4 あとはいま考えられないけど、そのような決まった言葉がないですね。(L08)

また、両方の表現形式を使用している学習者も存することが分かった。「こ/そ/あ」の談話上の使い分けの困難さもさることながら、近似の異形態の正しい待遇レベルでの使い方も、学習者には課題となるようである。以下、例5から8で、L01とL09の使用例を示す。

例5 (略) このような人とつきあっています。(L01)

例6 L01: そんな方法は、珍しいこと

IM: 珍しいですか。(L01)³⁾

例7 たぶん半日ぐらいそのような家事をしました。(L09)

例8 その日本の子どもがそんなことしますか。(L09)

L05、L06、L07、L11に関しては縮約形の「こ/そ/あ/どんな」のみを使用しており、母語話者と同様の傾向にあった。

4.1.3. 使用文脈における母語話者との異なり

データを詳細に観察すると、母語話者と同じ縮約形を使用している場合でも、その統語状況・使用文脈に異なりがあるものが存する。4.1.1であげた「けど」の類を例にとってみよう。一種類のみの縮約形を使用する学習者が存する一方で、L02、L04、L09、L10のように、少なくとも二種類以上の表現形式を用いている学習者も存する。その点で、後者には使用できる表現形式に広がりが見られるわけであるが、それぞれの使用文脈を詳細に観察すると、母語話者のそれとは異なった、待遇上ややふさわしくない使い方をしていることがわかる。

L02では「けど」以外に「けども」「けれども」「だけども」を使用しているが、全て接続詞としての用法で文頭で用いている。文頭でのこれらの使用は(一人の「だけど」の使用例2例の他には)母語話者のデータでは見られない。以下に使用例をあげる。

例9 {笑い} けども、日本の伝統は忘れないー、(L02)

例10 L02: 田舎はちっ、別にー、

IM: う、あーあ。

L02: あ、あります。だけども、

IM: あーあー。

L02: けれども、二番目から

IM: あーあ。

L02: パスポートないですね。(L02)

例11 うん、あるところもあるかもしれない、けども、北京はほとんどないと思います。

(L02)

L04では「けれど」「けれども」を「けど」同様に句末に用いるなど、使用表現形式の広がりが見られるが、「けどでも」という接続詞「でも」と組み合わせた二つの語を一語と(認識)して用いているという、誤用というべき用法が見られる。この点で、母語話者とは異なる縮約形の使い方が観察される。下に使用例を示す。

例12 L04: だいたいね、失礼ですけどでも、

IM: へー、

L04: 友だちに対してね、(略)(L04)

L09は「けど」と「けども」の二種類を使用しているが、「けど」を接続詞として文頭で用いている点が、母語話者の初対面での会話とは異なっている。使用例を例13にあげる。

例13 (略) 食器を洗いました。けど、んー、ぼくが子どもだったとき、ぼ、ぼくがしました。

(L09)

さらに、「けど」以外の例でも、文頭で接続詞として使用された縮約形に「で」がある。下に使用例を示す。

例14 で、あの、やりますねえ、「ええ」という相手のあいづち) なんか、子どもを傷しないように、(L02)

拡張形の例としては、「と」が本動詞の前において「って」になる例(「って聞く」等)が母語話者の発話より学習者の発話に多く見られたことがあげられる。

4.2. 考察

本節では、4.1で述べた分析結果で学習者の会話に見られた母語話者とは異なる現象について、その原因を考察する。まず、「けど」の類に見られた個人による使用表現形式の偏りに関してである。「けど」の類は、母語話者の会話では初対面の丁寧な状況の中、「けど」を中心に使われ、しかしながら状況やニュアンスにより「けれど」「けれども」などが使い分けられている(上原・福島

2004)。学習者が「けど」だけ、あるいは「けれども」だけに使用が偏っていることは、表現は知っていても微妙なニュアンス・状況による使い分けができるまでに至っておらず、その状況・機能全体に対して1つの形式を使用していることが原因としてあげられよう。よって多くの学習者が「けど」のみを使い、一方で「けれども」しか使っていないL06の場合は、丁寧な状況では全て「けれども」に固定して使用していると考えられるのである。

このことは学習者の学習期間や日本滞在期間の長さに応じて「けど」類の使用がより母語話者のそれに近くなっていることから裏付けられる。学習歴、学習環境に関しては表1を参照されたい。「けれども」のみを使用しているL06は学習期間は4年であるが、滞日期間が1カ月と短く、実際の母語話者の会話を聞く機会が非常に限られていたのではないかと考えられる(こういった学習者の場合も、自国で母語話者との接触があることもあるであろうし、使用した教科書、教授法など、さまざまな条件が複雑にからんでおり、一概には言えないのであるが)。また、他の滞日期間が1カ月という学習者にはL10、L11がある。そのうちL11はL06同様「けど」という種類の表現形式だけを使用しており、L06と同様の傾向を示している。その他「けど」のみを使用している学習者5名のうち3名が滞日期間1年以内であることも、滞日期間が短いため、母語話者の会話を聞く機会が限られていたことが、使用表現形式の偏りの一因であることを示唆している。その一方で滞日期間が1カ月しかないL10が「けど」と「けれども」という複数の表現形式を的確に使用しているが、このことは学習期間が10年と全学習者のうちで一番長いことが関係しているであろう。

次に、母語話者が基本形として使用している縮約形が学習者においては必ずしも基本形と認識されておらず、母語話者では実際の会話ではほとんど使用されない、縮約されていない表現形式が用いられる理由について考察する。これも、丁寧な会話においても縮約形が様々な形式において様々な度合で使用されるという、実際の姿を知らないうちは、学習者は丁寧な会話には縮約形はそぐわないといった一般化をすることによるのではないかと考えられる。4.1.2で取り上げた「こ/そ/あ/どのような」と、その異形態(縮約形)である「こ/そ/あ/どんな」の場合、「書き言葉」と「話し言葉」という文体の区別の問題が背景として存すると考える。「縮約あるいは拡張された形式、すなわち派生形がほぼ100%使用され、それ自体が基本形となった」とき、それを派生した「もとの形」は中立的な基本形としてではなく、より改まった形式としての機能を持つようになる(上原・福島2004)。そのようなニュアンスの変化が、母語話者には「話し言葉」に対する「書き言葉」の表現として捉えられることもあると考えられる。学習者には、こういった機能の変化から生じるニュアンスの差は感知しにくいものであろう。

第三に、表現形式の統語状況における母語話者との異なりに関してである。4.1.3で取り上げた「けど」の類に見られるように、学習者が(「けど」を文末のいわゆる接続助詞としては正しく使っているが)それを接続詞として使う場合に丁寧さの度合にふさわしくない使い方をしてしまうことについてである。これも、学習者がある表現形式を習得する場合、その形式が使用されてい

ることについては注目するが、その統語状況の異なりに注意が向くことは後になるからであると考えられる。実際、種々の文脈に応じた使用頻度にまで注意を向け、その表現形式の用法を身につけるには数多くの使用場面との接触を必要とする。そのため、「けど」や「けども」等を使用することはできても、その使用が文頭か句末か文末かといった区別にまで注意がいかず、全ての文脈で拡大して使用してしまうのであろう。母語話者が文頭でそれらを用いないのは、句末や、文末を「言い差し」の形でほかす場合と異なり、文頭は聞き手の注意が集まる場所であり、そこに縮約形を用いることは、初対面で丁寧体を用いて話す相手との会話においては「くだけすぎ」になるという判断が働くからであろう。実際の母語話者あるいはその会話に触れることが少ない状況にいる学習者の場合、こういった母語話者の意識ないしは使用状況を知る情報が少ないため、詳細な使用文脈において、異なりが見られると考えられるのである。

5. まとめ

日本語学習者の縮約形および拡張形使用の実態について、丁寧体を基調とした会話資料を用いて分析した。その結果、日本語学習者の縮約形および拡張形使用の特徴として、次の三つのことが明らかになった。1) 個人により使える表現形式に偏りがある。2) 母語話者では縮約形のほうが基本形となっているものでも、縮約形でない表現形式を用いる場合がある。3) 母語話者も使うが、それとは違う文脈で使っている表現形式が見られる。

上原・福島(2004)で指摘したように、母語話者の縮約形、拡張形などの派生形式の使用には、「初対面の丁寧な会話ではくだけた表現としての派生形式がほとんど使用されないものから、派生形式のほうが頻繁に使用され、それ自体が基本形となりつつあるものまで様々な」ケースがあり、同じ形式でも、「それが生起する統語的状況やその果たす機能によって、派生形式をとりやすい場合ととりにくい場合」がある。言語教育の場においては、そういった母語話者の実際の使用状況を学習者に示す必要がある。例をあげれば、「けど」や「そんな」などをよく使用される縮約形式として、その形式のみを教えるのでなく、「丁寧度や改まり度の関係から、文頭の接続詞としての「けど」や「そのような」が母語話者では使用されにくい傾向がある」ことまでを示すということである。

言語教育に当たっては、言語使用の実態を調査したうえで、その結果を反映した指導を行っていくことが重要である。今後、本研究の結果を教育に応用する方策を探っていきたい。

注

- (1) 167例中、「けど」138例(83%)、「けれども」23例(14%)、「けども」4例(2%)、「けれど」2例(1%)という使用率であった。また、1名は「けど」のみを用いていた。
- (2) 表中、「句末」というのは後に文が続く「けど」の接続助詞的用法、「文末」は後に文が続かな

い終助詞的用法、「文頭」とは前の文から続いていない接続詞的用法のことである。実際、「句末」と「文末」の判断の困難な場合があるが、その場合は明らかに文がそこで終わっている場合にのみ「文末」とし、それ以外は「句末」とした。

- (3) 例中 I は会話相手の母語話者を、M、F はそれぞれ男性、女性を表す。

参考文献

- 上原聡・福島悦子 (2004) 「やっば丁寧に話しちゃいますんで：丁寧体の会話における縮約形とくだけた表現の使用」『Fourth International Conference on Practical Linguistics of Japanese (CONFERENCE HANDBOOK)』, 42 - 43
- 大坪一夫 (1982) 「縮約形」『日本語教育事典』大修館書店, 51 - 52 .
- 川瀬生郎 (1992) 「縮約表現と縮約形の文法」『東京大学留学生センター紀要』第2号, 1 - 24 .
- 斉藤純男 (1991) 「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』第6号, 89 - 97 .
- 土岐哲 (1975) 「教養番組に現れた縮約形」『日本語教育』28号, 55 - 66 .
- 堀口純子 (1989) 「話しことばにおける縮約形と日本語教育への応用」『文芸言語研究 言語篇』15号, 99 - 121 .
- 峰岸玲子 (1999) 「日本語学習者への縮約形指導のめやす 日本人による評価と使用率をふまえて」『日本語教育』102号, 30 - 39 .